百合子賞　正賞　受賞作品

霖雨のち天使の梯子

郡山市立郡山第五中学校

第一章　雨と彼

俺は「河西聡汰」。鳥籠に閉じ込められた小鳥のような中学三年生だ。さっき、将来の夢を親にぶち壊された。それでたった今、雨の中、傘を持たずに飛び出してきたのだ。しかし、いつの間にか見知らぬ住宅街に迷い込んでしまって、どうすることもできずに自動販売機の隣で蹲っている。

悪いのは、息子の夢を馬鹿にした二人だ。

中三になってまで、未だ人のせいにしてしまう自分が子供だと、独り落胆する。もうすぐ高校生だというのに。

秋半ばの雨はやはり冷たい。おまけに礫のような勢いだ。肌を叩き続け、濡れ鼠になってしまっている。

ふと、降る雨が音だけになった。

「おいそこの少年、風邪ひくぞ。」

聞き覚えがある……気がする。

視線を上げると、黒いワンピースを着た人が傘を傾けてくれていた。だが、俺の脳から出てきた彼の名を口にした途端、この人の優しさが一瞬にして不快に変わった。

「斎賀……。ん？斎賀⁉何でこんなトコにいるの⁉」

「同じ質問で返すよ。どうして河西君も、こんなトコでおしょんぼりしているのかな？」

俺を煽ったこの少年は「斎賀悠也」というクラスメイトで、春に転校してきたやつだ。だが、学校に馴染めず来られなくなった。

「あれ、学校は？今は六校時目じゃ？」

「今日は土曜日だろ。」

立ち上がるのと同時に答える。本当ならば無視をしたいが、コイツが相手だと余計面倒なことになる。そうなる前に、一刻も早く立ち去りたい。気持ちばかりが焦る。

「あ、待ってよ。君、迷子っしょ？」

さっきの返事の冷たさを感じなかったらしく、斎賀は変わらぬ口調で声を掛けてきた。俺は雨音で聞こえなかったことにし、返事をせずに道路の向こう側へと進む。コイツと立ち話なんぞ、洒落にならない。

ふと、一瞬で辺りが暗くなったと感じ、振り返ろうとする。その時、風を切る音と共に頭に衝撃が走った。

斎賀が傘を振り下ろしたのだ。それは見事に脳天直撃。俺は頭をおさえ、涙目になりながら彼を怒鳴った。

「いてぇ！何すんだよ！」

「迷子には道を教える！常識でしょ！」

雨音に負けじと声を張る。相変わらずの長い前髪と話し方に、不快感を覚えた。何故コイツはいつもこうなんだ？

「あのさ、よくアイツらと一緒にイジメてたやつに話し掛けられるよな。」

「君は一緒にやってない。観てただけ。」

「傍観者もイジメに加担してんだよ。」
突き放すように言ったつもりだったが、余計だったらしい。なおも彼は食いつく。
「私のせい。私がその、へ、変だからイジメたくなるんだよ。それに、誰だって止めに入るのは怖いっしょ？」
……違う。
「皆が皆、そんなキレイな理由じゃない。」
一度冷却された脳が、間を空けてそう言うように指令した。
睨むようにして彼を見ると、彼は首を傾げている。意味をよく理解していないらしく、むうっという表情だ。
「わからないよ、皆の理由なんて。」
斎賀はぐっと傘を持つ手に力を込める。
「だから、わかるようにしたいの。」
泣き出しそうな声は、霖雨の中で何故だかよく聞こえた。サアサア降る雨音よりも、ポツポツ音を立て、雨粒を受け止める傘の音よりも、優しい声の方が響いた。
俺はつい「は？」と聞き返す。そんな態度をとっても、彼の主張も表情も、傘を傾ける姿勢も、変わることはなかった。
「もう一度、あの教室に戻りたいから。」
……やっぱり、おかしい。
普通は誰だって、一度陰湿なイジメを食らえば二度と、教室に戻りたいと思わないだろう。
なのに、斎賀は戻りたいと言った。再びイジメが始まるかもしれない、否、その可能性しかないというのに、戻りたいと言った。
彼が優しいことは誰もが認めるだろう。だが、おかしいということもまた、多くの人が頷く筈だ。つまり彼は、普通ではない。
「そのためには、皆のことを知る必要があると思うの。知っていれば、その人その人に合った対応ができるはず……。」
普通ではないと言われ続けても、どうにかしようと必死になっている。どうして、そこまで必死になれるのかと、こちらが訊きたいくらいだった。
俺はわざとらしく、大きな溜息を吐く。
「……自分でわかってる？いかに自分が普通じゃない人間だってことをさ。皆はそれに引いてるし、本気で気味悪がってんだよ。」
はっとして斎賀に、もう一度ピントを合わせる。言い過ぎてしまったのではないかと、不安に思った。
恐る恐る声を掛けようとしたが、視線の先の、透明な雫のせいで息が漏れただけになってしまった。それでも彼は――笑っている。
無理に口角を持ち上げ、仮面のような表情だ。長い前髪の僅かな間から、きらきらと光る睫毛が見える。
「駄目だなぁ、こんなすぐ、泣いちゃうなんてさ。」
初めて顔をそらす。
「結局は、自分のせいだったのか。自分が自分の首をしめていたのか……。」
やっぱりおかしかったんだね、と悲し気に笑ってみせた。
空気の抜けた風船のように、力なく傘を下ろす。これで二人そろってびしょ濡れだ。彼のふんわりとしたワンピースも、色を濃くして重くなった。
強くなる気配も、止む気配も感じさせない霖雨は黙って雨水を注ぎ続ける。この出来事の行く末を見守るだけだった。
何を思ったのか、俺は斎賀の傘を持ち上げようと、片手を伸ばし掴んだ。だが本人が、柄を持つ手に力を籠め抵抗する。
「風邪、ひくよ。」
「私はいい。君が差したいなら貸す。」

柄を差し出してきた。斎賀はいらないのかと尋ねてみたが、彼は俯いたまま答えない。
どれ程、そうしていただろう。
雨脚が衰えることなく、叩く雨はとても冷たく、痛い。
ずっと、彼のうなだれた頭を見ているだけで、何もできないでいた。彼を傷付け、俯かせたのは紛れもなく俺だ。だから、責任は俺にある。謝るつもりはないのだが、心の何処かで後ろめたさと後悔が、強く強く噛みついていた。
「君は、優しい。」
彼が何の前触れもなく言う。そして顔を上げ、こちらの目をしっかりと見た。斎賀の瞳は小刻みに、気づかないくらい小さく震えている。
「まだ、ココに居てくれるから。」
彼に表情は無かった。しかし確実に、恐怖という感情が読み取れる。きっと斎賀は、俺がココから立ち去り、再び孤独の手が伸びて自分を引きずり込むことを怖がっていたのだろう。
それからまた、俺と斎賀は黙った。ただ代わりに、雨音が鼓膜を揺らす。その音がまるで、俺を笑っているように感じた。
意を決し、声に出す。
「どうして教室に戻りたいの。」
自分が彼を理解しようとしていることに気がつき、正直自分も驚いている。
斎賀は露骨に戸惑い、一歩退がった。
「わ、私は……わかり合えば、誰とだって仲良くできるって、信じているいるから。」
彼は続ける。
「友達ってのは、多分、互いをよく知っているから仲良くできると思うの。『わかり合う』ことが皆でできるなら、上下の関係なんかより、もっと仲良くなれるはず。それをクラスでもやれば、きっと、きっと……！」
「そのきっかけに、自分がなろうって？」
え、と言おうとしたのか、彼は口を半開きにしたまま硬直する。瞬きを繰り返し、暫くしてから首肯した。
わかり合う。
つまり、自分からも相手からも理解への意欲が必要だ。彼ばかり話をしては、こちらがずるくなってしまう。という訳で、自分からも話をしなくてはいけない。
「……俺のことでいいなら話す……けど。」
我ながらひどく曖昧だと苦笑する。自分の話を嬉々としてする人間があろうか。それもあの記憶ともなると……。
「いいの？本当に？」
前髪を分けるのと同時に尋ねてくる。やっとマトモに両目が見えた。
少しくらいなら、と小さく答え、俺らは近くのバス停のベンチで話すことにした。

第二章　曇った過去

中一の頃、俺らが「アイツら」と裏で呼んでいる問題児らの内、三人が同じクラスだった。その三人が悪いことをするなんて日常茶飯事。先生たちも手を焼く不良だ。
ある日、小五来の友人「本田奏」がアイツらの行いに一喝した。その時、誰もが彼女を英雄だと思っただろう。アイツらは呆気にとられ、そそくさと退いた。皆は彼女の勇気を一斉に讃えた。明日から、本田がアイツらにイジメられるとも知らずに。
彼女は冬の初めに、登校することをやめるようになった。一部のクラ

スメイトは、賢明な判断だと笑った。
あれから彼女に会ったのは、あの一度だけだ。帰宅の途中、ばったり会ったのだ。
「ひ、久しぶり。ええと、本田って二組だよね？俺五組だから、あんまり会わ」
「よく、友達を見捨ててそう笑っていられるのね。」
明るく前向きな本田は、もう、そこにはいなかった。代わりに冷たい声を出す少女が、俺と会話している。
「その、ごめん……。」
「謝ってほしい訳じゃないし。ただ――」
彼女が一歩踏み出し、すれ違い様にこう言い捨てる。今も、はっきり憶えている。
「友達を何とも思わない人間に、ひたすら腹が立つの。」
それから、俺は他人との関わりに恐怖を感じるようになった。
俺が本田にしたことと同じように、俺がアイツらにロックオンされても、助けてくれないのではないか。俺を何とも思っていないのではないか。そんなことが脳裏をちらついてきて、怯えるようになった。
日向とも日陰とも言えない狭間で、誰かを救いも助けもしない空気でいた。何も必要としていない。何も奪われることもない。ここにいれば良いのだと信じていた。
ある日、転入生が来た。それも、アイツらが好物としている類だった。
案の定、イジメが始まった。
でも、自分とは関係のない人だ。
友人でもなければ、助ける義理もない。
友人だった本田がイジメられていても、ただ観ていた俺に何ができる？関係の無い奴がイジメられていても、俺が出しゃばる理由があるか？
ない。だから、傍観者で居続けた。――
「……サイテー。」
開口一番、斎賀が呟いた。俺もそれを肯定する。
「うん、俺は最低だ。」
「いいや、河西君じゃないよ。」
まさかの否定に、俺は少し遠くに座る彼を二度見してしまった。ついに、物事を判断する能力が狂ってしまったのか？
「説明するから。そんなあからさまなリアクションしないでよ。」
笑いをこらえるような声で言う。斎賀は立ち上がり、手の動作を入れながら説明した。だが彼は、こちらを見ずに道路に向かっている。
「河西君はその、本田？って子と会っても話さないっていう術もあった筈だよね。なのに、君は彼女に声を掛けた。」
斎賀は人さし指を立て、続ける。
「それってさ、その子を心配したからじゃない？でも、伝わらなかった。いや、拒絶したんだよ。この子は私を見捨てた、もうトモダチじゃないってさ。」
今まで考えたこともなかった。てっきり、全部自分のせいだと……。
「結局、自分の思い込みで絶望してんの。」
おわり！と勢い良くベンチに座り、足を組んだ。かなり満足したらしい。
俺はただ、呆然と左に座る彼の横顔を見つめていた。すっきりしたのか、表情は清々しく見える。
もしかしたら、斎賀はそこらへんの人間よりも「人」を見ているのかもしれない。考え方や見方が他人よりも、一歩前になっているだけなのかもしれない。
そう思えるようになったなら、あとは簡単だ。俺は視線を前に向けた。
「斎賀の話も、聞いていい？」

チラリと彼の様子を窺う。彼はこちらを見て、ニィという変な笑い方をする。そして、待ってましたと言わんばかりに返した。
「もっちろん。」

第三章　晴れた空を飛ぶ鳥

私がトランスジェンダーだと気がついたのは、ここに引っ越した後だった。自分が他人と違うことを、信じられずにいた。
河西君たちの中学校の前に、隣町の中学校に二年間、過ごしていたの。そこは、イジメなんてものはなくて、一応楽しかった。けれど、私の扱いが難しいのか面倒なのか、離れていってしまってね。何なら、しっかりイジメられてしまって、学校を替えたかった。そうしたら、一年も執着しなくて良かったのにな。無駄に居心地が良くて。
……ごめん。強がりは良くないよね。
本当は怖がっていたの。私を見て、クラスメイトが指をさして笑うことを。惨い言葉を振り翳し、私の心を殺すことを。自分以外はきっと理解できないだろうと、諦めていた。
日を重ねるごとに、私の周りにいてくれていた子はいなくなっていき、また私も、体調を崩して休みがちになってしまった。心も身体も、他人との関わりに拒絶反応を起こすようになってしまったの。
もう、君は駄目だ。
洗面台の鏡の中、偽りの自分がそう泣いているように感じた。じっと、静かに。
鏡に反射した蛍光灯の光で、異様に明るい洗面台。両親の小さな寝息。荒れ放題になってしまった自分の肌。首元に翳す、少し錆びたカッターナイフ。昼夜逆転した脳。
全てが偽せモノのようで、死んでも大丈夫だろうと、悠長に思えた。死に対しての恐怖をあの数分間、感じていなかった。
でも、刃を当てた喉仏のある首を見ると、改めて脳に刻まれるんだ。
自分は、やっぱり男だって。
はじかれたように、自分を取り戻す。停止していた思考が、再起動する。そして、死のうとした自分からカッターを引きはがした。
大丈夫、私は私でいい。死ななくていいから…。そう自己暗示していた。
でも、暗示し続ければし続ける程、苦しくなって、自虐することも増えた。体がもつ訳でもなく、私はいつもベッドの上にいた。
そんな中、私はあるコトを思いついたの。
明日から、自由に生きてみようってさ。
学校に行かない。好きなことをする。親やアイツらが何を言ってきたって泣かない。笑顔を心掛ける。そして、逃げない。
自由なルールを作って、私はそれをとことん守った。勿論、これからも守るよ。
逃げないっていうのは、ありのままの僕(わたし)でいることって意味。笑われても、陰口叩かれても、私は私のままだからね。――
最後は笑って締めくくり、立ち上がる。くるりと回り、ワンピの裾が弱くなった雨粒を受けた。まるで少女のようだと、俺は思う。
目の前で回った人間は、どう見ても少年である。だが一人の人間であることに、違いはない。それは、誰にも当てはまることだ。アイツらや大人も、俺らと同じ。
彼、否、彼女を見ていたら、いてもたってもいられなくなった。
「斎賀。明後日、学校に来ないか。」
止んだ雨雲を見上げていた斎賀が振り返った。前髪がはね、左目を隠す。
「一人じゃなければ、怖くないだろ。」
「……あははっ言う通りだけど何それ。」

パッと笑い声を上げる。何だ、仮面をはずしても上手に笑えるじゃないか。そう思ったら、自分も笑えてきてしまった。
両親やアイツらを満足させるためだけの人間は、嫌。顔色を窺うのも、馬鹿にされるのも、もう嫌だ。俺は思っていたよりも、良い子ではないのだから。
「まずは、親に反抗期宣言だな。」
斎賀に聞かれないように、小さく呟く。
雲の切れ間から、放射状の光柱が放たれ、「天使の梯子」が現れる。あたたかくも、鋭い光は、何故だかいつもより美しく神秘的に俺の目に映った。
強い風が吹く。頬にはり付いていた髪が、徐々に乾き始めたらしく、所々で風に身を任せていた。
斎賀も、両手を広げて風を全身に受けている。長い前髪がワンピのように浮き、彼女の視界を明瞭にさせた。
彼女にも、俺と似たような景色が見えているのだろうか。言葉だけでは表しきれない、心を一瞬にして奪う程の景色を、彼女はどう見えているのだろうか。
やはり、分からない。
同じ人間であって、違う人間なのだから。俺は俺でしかなく、彼女も彼女でしかないのだから。
それでも、同じ地で生きる人間だ。互いを認め、尊重し、手を取り合い、それを誇りに思うこと。斎賀悠也という少女が教えてくれたことだ。
わかり合わなくてはいけない。それがたとえ、長い道のりだとしても、この世の全てとできなくても。
鳥籠の中の小鳥に何ができるのか。飛ぶなと言われた小鳥に何ができるのか。それは――
自分一人でも、わかり合おうとする心を大切にする。
その心を忘れずにいる。
その心を守り続ける。
その心を灯し続ける。
鳥籠の中でできることを考え続ける。
あの天使の梯子が架かった空を、俺はいつまでも飛ぶことはできないだろう。だが今、自分がいるこの鳥籠の隙間から差し込む光によって、天使の梯子に似たなにかは確かにある。その光に包まれ、夢をもう一度創り直そう。
光に目を細め、まだわからぬ未来を思い浮かべる。
鳥籠から一歩先に飛び立った斎賀は、教室という狭苦しい空間の光となり、皆を梯子の元へと案内するのだ。アイツらも、本田も一緒に。そして、梯子を登り切ったそこには、誰もが笑える世界が広がっている筈だ。
もしかしたら、登り切れずに諦めている人もいるかもしれない。ならば、俺が鳥籠の中から応援してやろう。
皆が翼をそろえて広げる。俺も、鳥籠の中で広げてみる。
そんな情景が浮かんできて、つい笑ってしまった。
「どうかした？何が面白いの？」
ニヤニヤと笑う斎賀が言う。俺は首を振って「何でもない」と誤魔化した。
ぴゅっと風が横切る。
変化する光柱は辺りを朱色に染め、水溜まりがそれを反射した。明るいバス停に二つの影が伸びる。
彼女は傘を手に取り、バス停の屋根から出た。気恥ずかしそうに笑いながら。
「月曜日、学校でね。じゃあね。」
「うん、また。」

俺も笑い返し、道路を辿って帰ることにした。ここからなら、家もわかる。

まだ微かに、俺の鼻先に漂う雨の匂いを
いま確かに、私の胸にあふれる光の声を
決して忘れないようにと、願った。

おわり

（指導教諭／命　長　敬　史）

《作品の意図》

個性や自分らしさを表に出すことは、いけないのでしょうか。今、多様性の社会と言われていますが、男女の差はあることに変わりありません。男子だから、女子だからという決まり文句に、私は疑問を感じていました。

主人公・河西聡汰は両親のせいで鳥籠の小鳥になっていました。ある雨の日、彼は両親への不満が爆発し、家を飛び出してしまいます。そこで、「普通ではない」クラスメイト・斎賀悠也と出くわしてしまい…。聡汰は彼を「普通ではない」と決めつけ、彼を傷付けてしまいます。「わかり合う」をテーマに、自分らしく書きました。皆さんの心に少しでも残ってくれれば幸いです。

《作品の寸評》

トランスジェンダー斎賀悠也を登場させ、多様性の社会について考えさせる作品である。作中、「わかり合う。つまり、自分からも相手からも理解への意欲が必要だ。」とテーマが明確に述べられている。

斎賀悠也と河西聡汰が互いを理解しようとしている二人の心理描写が丁寧に描かれていて見事である。いじめの捉え方も通り一遍ではなく、斎賀の立場から深く内省させている。

情景描写もすばらしい。特に「孤独の手が伸びて自分を引きずり込む」「雨音が鼓膜を揺らす。その音がまるで、僕を笑っているように」といった比喩表現に作者の筆力を感じた。

作品の構成にも工夫が見られる。第一章「雨と彼」で中三の現在を描き、第二章「曇った過去」で中一の回想を描き、第三章「晴れた空を飛ぶ鳥」で斎賀にカミングアウトさせている。第一章と第二章では斎賀を「彼」と表現しているのに対し、第三章でカミングアウトした後は「彼女」と表現している点は、中学生とは思えない高度な技だ。また、各章のタイトル「雨」「曇った」「晴れた」が、作品名の『霖雨のち天使の梯子』に繋がるように意図したのだろう。さらに、冒頭の「鳥籠に閉じ込められた小鳥」が、終末で「鳥籠から一歩先に飛び立った斎賀」に触発され「鳥籠の中で翼を広げてみる」という呼応も絶妙である。

社会的な重いテーマを取り上げながらも、この先前向きに生きていこうとする斎賀悠也と河西聡汰の姿から、読者に爽快感を与える作品に仕上がっている。

（審査員／宗　形　幸　子）